

死後どこに行かれるか？

アダム・クジャク

来月は死者の月になります。ルカによる福音（16・19－31）金持ちとラザロについて語られています。この個所は、この世で与えられた富みの用い方によって、私たちが行く場所が異なるということを教えている例え話です。皆さんは、自分がこの地上の生涯を終えた時、どこへ行くのか考えたことがありますか。自分という存在は、死をもって無くなってしまおうのでしょうか。そんなことはありません。肉体は、朽ち果てて、土に帰っていきます。しかし、霊魂は不滅ですので永遠に生きています。私たちの霊魂は、どこで生きるのでしょうか。誰もが、地獄ではなく、天国へ行きたいと思えます。この個所は、そのことを教えてくれる、とても興味深い、私たちの人生にとってとても重要な話です。このように、生前とは対比的に、生きていた時に恵まれていた金持ちは地獄に、恵まれなかったラザロは、天国へ行くことになったというのです。この二人には、どういう違いがあったのでしょうか。ラザロと金持ちには、どういう違いがあつて、一方は、天国で、他方は地獄に行くことになったのでしょうか。まず、金持ちは、生涯、良いものを受け続けていたにも関わらず、それを自分の楽しみのため、自分を喜ばすためだけに用いたのです。門前にいたラザロに対しても無関心で、彼のために食事をもてなしてあげたり、皮膚病で苦しんで弱っていたのに、薬を買ってあげたり、医者に連れて行ってあげたり、そういうことはしませんでした。ラザロに対して、意地悪をするということはありませんでした。しかし、積極的に彼のために愛を示すということはありませんでした。彼は、金持ちだったから地獄に行ったのではありません。神への信仰が全くなかったからです。そして、その結果として、ラザロのように、彼の助けを必要としていた不幸な人を見ても、全然助けようとしなかったのです。それに対してラザロはどのような人物だったのでしょうか。彼は、貧しく病気で本当に恵まれない境遇にありました。しかし、この金持ちや神様をうらんだりすることはありませんでした。特別に何かを求めることなく、金持ちの食卓から落ちる食べ物で、満足していたのです。ラザロは、貧しかったので天国へ行けたのではありません。神を信じて、神様だけを頼りとして、主が与えてくださるもので満足して生きたので、天国へ行くことができたのです。私たちは、この世で委ねられた富みを、所有物を、例え話の金持ちのように、自分のために、自分を喜ばすことのためだけに用いる者ではなく、食べるのにも困っている人のために、病気で苦しんでいる人のために、用いていきたいと思えます。また、ラザロのように、たとえ恵まれない境遇に置かれていた

としても、人や神をうらむのではなくて、置かれている状況を受け入れて、神を信じ、神により頼む、そういう歩みをさせていただきたいと思います。